
小説・人狼ゲーム（知識編）

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説・人狼ゲーム（知識編）

【Nコード】

N4016I

【作者名】

iris Gabe

【あらすじ】

銘々が生きのこりをかけて、互いの正体をさぐり合う人狼ゲーム。心理的なかけひき、攻防が交叉する中で、あなたは冷静な行動を選択することができるだろうか？

読者への挑戦状を掲載した本格推理小説。

名もなき村（前書き）

「小説・人狼ゲーム」は、知識編、出題編、解決編の3部構成になっています。

知識編では、人狼ゲームの背景とルールを説明いたしました。いきなり、出題編から読むこともできますが、背景とルールを確認してから読まれたほうが、内容をより楽しめると思います。ご面倒ですが、まず知識編から順番にお読みください。（作者）

名もなき村

ここは、名もなき村……。わずか九人が居住する平穏なこの村に、これから五日間にわたって、世にも残忍で猟奇的な連続殺人がくり広げられようとは、はたして誰が予測しただろうか？

実をいうと、名もなき村にはかつて、この呪われた事件と酷似した血なま臭い惨劇がおこっていた。それは、もう百年以上も昔の話になる。周囲から閉ざされた山間にポツンとたたずむ名もなき村には、総勢四十二名の村人が仲よく暮らしていた。時の国王が暗殺されて、国家が君主制から共和制に移行したときでさえ、この村では変化らしき変化というものが全くなかった。そう、この自給自足の村は、完全なる孤立したコミュニティでもあったのだ。村人は滅多なことでは山を越えようとせず、また近隣の村落の住民たちも、まれにこの村を訪れることはあったが、せいぜい、一夜の宿を借りて、礼をいってたち去るくらいなものであった。

そんな中で、惨劇は勃発した。ある日、隣村の狩人の若者ふたりが、獲物に夢中になって、ついつい森のおく深くに迷いこんでしまった。さんさんの苦勞のあげくに、ようやく彼らは、名もなき村まで辿り着くことができた。しかし、そこでふたりが目あたりにした光景は、およそ文章で表現することもはばかられるほど、陰惨この上なくおどろおどろしいものであった。

村のあちこちには、無数の死体が散乱していた。あたりには死人特有の異臭がたちこめ、死肉をあさるうと競り合うカラスたちの黒たかりができていた。血だまりの中に、幼児の左足がおちていた。村はずれの水車小屋では、両目をカッと見ひらいた美しい農婦が、内臓をえぐられたまま仰むけに倒れていた。たわわに実ったトウモロコシ畑の中央には、風来坊の首なし死体が大の字になってころがっていた……。

やがて陽が沈み、ふたりの若者は心ならずも、ここで一夜を過ご

さなければならなくなった。夜は刻々と更けていき、村は漆黒の闇と静寂につつまれる。ふたりは、村のすみっこに位置する廃墟で、ささやかな眠りに就いていた。

突然、片方の若者の悲鳴がした！

もうひとりの若者が武器をたずさえて駆けつけると、相方は、ひとりの男と格闘をしている最中であつた。そいつは、およそ人とは思えない邪悪な姿をしており、不気味な低いうなり声をあげていた。強靱な肉体には獣のような体毛がびっしりと生えており、大きく切り裂けた顎からは大量の唾液がしたたり落ちていた。獲物を見すえる瞳孔は、狂気のあまり爛々^{たまた}とぎらついていた。若者は、無我夢中で猟銃をかまえると、弾を魔物に乱射した。まもなく、魔物は動かなくなつた。襲われた若者は左腕をひじから喰いちぎられていたものの、命に別状はなかつた。

翌日、村中を探索したふたりは、隠れひそんでいた村人の生きのこり十三人を見つけ出した。結局、この忌まわしい事件の犠牲者は、魔物自身も含めて総勢二十九名にのぼつた。

程なく、オスカーという名の若い青年医師が書いた悲しい手記が発見された。それによると、オスカー青年は凶狼病という原因不明の病に犯されていた。深夜に人間のおいを感じると、手足が震え出して意識が遠のいていく。気がつけば、変貌した強靱な顎で、村人を次々と噛み殺していた。やがて、この異常な症状を自覚したオスカー青年は、気が狂いそうになるのを堪^たえ忍んで、手記に自らの症状を克明に記していった。彼は幾度か自殺を試みたが、いざ実行に移そうとすると、意識が薄れて身体が人狼に支配されてしまうとも、記載されていた。手記の最後には、これを発見せり者は速やかに我が身を撃ち殺してくれることを願うと、つけ足されていた。この呪われた惨劇は、村の生存者たちによって、親から子へ、子から孫へと代々語りつがれていった。

あれから、百年以上の歳月が流れている。現在の名もなき村は、以前のような平穏を回復したと誰もが疑わなかつた。しかし、あの

おぞましき凶狼病の感染者は、ひそかに村人の一部にまぎれこんでいたのだった……。

汝は人狼なりや？

「あなたなの、連絡があつたアイリスさんって？」碧い眼が印象的な女性が私に声をかけた。

「はい、はじめまして。アイリス・ゲイブです。こちらで定期的に人狼ゲームが催されると伺いまして、やってきました」緊張しながらも私は答えた。

「そうなんだ。私はミスズといいます。よろしくね」女性は優しく挨拶してきた。

「私、人狼ゲームは全くのはじめてで、ルールもなにも知りません。どうか、わかるように説明していただけませんか？」恐る恐る私は訊ねてみた。

「あら、そうなの。わかつたわ。まだ仲間が集まるまで時間があるから、私でよければ喜んで説明いたしますよ——」ミスズはとても親切だった。

「人狼ゲームのオリジナルは、米国のルーニー・ラブス社が考案した『汝は人狼なりや？』という登録名のカードゲームなの。内容はというと、まあ一言でいってしまえば、コミュニケーションを通じて他人の正体を推理して遊ぶパーティゲームね。ルールはちょっと複雑だけど、慣れれば十代の子供でも十分に楽しむことができるわ。最近ではインターネット上で展開されるオンラインゲームの環境下で、結構人狼ゲームはもてはやされているのよ」

「オンラインゲームって、私たちが今いるこの環境のことですよね」私が訊ねた。

「そうよ。まずは、オンラインゲームを簡単に説明しておくわね。インターネットなら、複数の人が同じ画面を共有しながら文字入力ができるよね。お互いに自分の思いをタイプし合えば、リアルタイムの会話を交わすことができるわ。いわゆる、チャット機能と呼ば

れるものね。ただ、チャットでは言葉の単なるやりとりで過ぎない。さらにリアリティを追求した結果、自分の身がわり画像（アバター）を画面に表示しながらチャットをするという、新しい形態のコミュニケーションが考案されたの。これなら、アバターを好みの容姿におしゃれするという楽しみも増えるしね」

「アバターって着せ替え人形みたいですね」私が口をはさんだ。

「そうよね。このようにネット上でアバターを表示しながらチャットでコミュニケーションをはかつて、おのこの目標達成を目指す余興がオンラインゲームなのよ」

私が入っている環境も、とあるオンラインゲームであった。そこで人狼ゲームを楽しんでいるグループ『朧月会』の活動が掲示板に紹介されたので、興味を持った私は彼らの集合場所へとやってきたのだった。どうやらミスズは朧月会のリーダー的な存在でもあるようだ。

ミスズはさらに説明を続けた。「ほとんどのオンラインゲームでは二つのチャット機能が用意されているわ。一つは大勢で交わされる普通のオープンな会話機能で、もう一つは特定のふたりの間だけで密かに交わされる秘密の会話機能よ。秘密の会話をおこないたい時には、交信したい相手を選んで、秘密の会話の特殊モードをたち上げればいいの。たとえ秘密の会話モードをたち上げていても、秘密会話をしていること自体が第三者にはわからないようになっていし、会話の内容が当該者以外に漏れることもないわ。人狼ゲームは、この二つのチャット機能を上手に使いわけて遊ばれているのよ」

「へー。秘密の会話モードですか。それって私でも簡単に使えるんですか？」私が訊ねると、

「大丈夫よ。今からやり方を教えるわ」ミスズがうなづいた。

「じゃあ、いよいよ人狼ゲームについての詳細を説明するわよ」ミスズがいった。

「はい、お願いします」私は背筋を伸ばして身構えた。

「舞台は、名もなき村……。ゲームの開始前に住民たちには、つまりゲームの参加者たちには、それぞれの役割が割り振られます」

「役割ですか？」

「そう、人狼ゲームはね、村人側と人狼側の二チームによる対抗戦で勝敗を争うの。そして役割というのは全部で五種類あって、まず村人側には、村人、祈禱師、牧師の三種類が――、対する人狼側には、人狼、狂人の二種類が――存在します」

「ふむふむ、複雑ですねえ。どうすればチームが勝つことができるんですか？」

「あらかじめ、ゲームには終了時刻が定められていて、その終了時刻までに、人狼がいなくなるか、あるいは、村人側の人間がたった一人でもいいから生きのこれば、村人側が勝利します。逆に、人狼側が勝つためには、終了時刻までに村人側のメンバー全員を皆ごろしにしなければならぬわね」

「うわー、怖いですね……。皆ごろしですか？」

「参加者たちの運命を大きく左右する役割は、あらかじめゲームマスターから、秘密の会話をとおして個々のプレイヤーに連絡されます。参加者たちは自分の役割がなにかは認識できるけど、他人の役割についてはなんの情報も与えられないの。ただ一つだけ例外があって、人狼たちには仲間の人狼が誰かという情報が、ゲームマスターから全ての人狼たちに連絡されるのよ」

「それって、ずるくないですか？　人狼だけが仲間が誰だか知っているなんて」

「そうね。でも、逆にそれくらいの情報がないと、なかなか人狼も大変なのよ。なにしろ、村人側を全滅させなきゃ勝てないんだからそれに、人狼同士が誰なのかは知っていても、狂人が誰なのかということまでは、人狼も知らないんだから」

「狂人って？」

「あつ、そうか。まだ説明してないよね。ごめんなさい。順番に説明していくね」

「はい、お願いします」

「ええと、どこまで話したんだっけ？ そうそう、人狼同士は互いに仲間を知っているのよね。そして、ゲームの途中でいつでも人狼同士で秘密の会話を利用することが許されているのよ。人狼以外の役割の参加者たちには、秘密の会話機能そのものの使用が禁止されているの」

「こっそり使っちゃったらだめですか？」

「それはルール違反だし、ゲームが興ざめしちゃうわよね。少なくともうちの仲間でそんなズルをする人はいないわ」

「人狼同士はテレパシーで意思疎通ができるという設定なんですね」「そういうことになるわね。会話をとおして、ゲームに参加している他人の正体をさぐり合いながら、チームの勝利を目指すため虚実のかけひきを交わしていくのが、このゲームの醍醐味といえるわね」ミスズがいった。

ミスズがさらに続けた。「ゲームは初日の夜からはじまって、二日目の朝、昼、夕、夜、そして三日目の朝、……、というように進行していくの。今晚催されるゲームは、終了時刻が五日目の夕刻までと設定されているわ」

「随分、長いんですね」

「そう？ 多分、ずっと終わっちゃうと思うけど……、まあいいわ」ミスズは続けた。「毎日、時刻に応じて決まったイベントがおこなわれます。まず夜だけ——、参加者が二人ずつのペアを組んで（最後に三人があまった時には、その三人が一組になります）同じ部屋に宿泊するの」

「へー、お泊りですか……」

「そんなに楽しいものじゃないかもしれないわね……」ミスズが苦笑いした。

「そのお泊りする相手はどうやって決めるんですか？」

「いい質問ね。部屋割りには、ゲームマスターが決めた順番にしたが

って、生きのこっている住民がひとりずつ、同居したい人物を指名していくのよ。このとき、前日に同居した人物を連夜にわたって（一日以上の間をおけば過去に同居した人物でも指名することは許されている）指名することは禁止されています。一方、指名された人は拒否することはできません。こうして、決まった部屋割りにしたがつてそれぞれが一夜を共にします。部屋の中では同居人の間で自由に会話をすることができるわ」

「なるほど、部屋の中で同居人とお友達になれるんですね」

「あのね……、夜って人狼や狂人が本性を暴露する危険な時間帯なのよ。翌朝には死亡者が出たと報告される部屋もいくつか出てくるわ」

「えー、死んじゃうんですか？　なんで……？」

「ふふふっ……。そこでいろいろおこなわれるの。殺人とか自殺とかね」ミスズは不気味な笑みを浮かべていた。

「ひえええ、夜って、怖いですう……」

「そのスリルがまたゲームの面白さでもあるのよ。生きるか死ぬかのぎりぎりの攻防がね。先に進めましよう。翌朝、昨晚の死亡者全員がゲームマスターから参加者たちに報告されます。死亡したプレイヤーはゲームを脱落して別の場所に隔離されます。彼らはその後生き残ったプレイヤーとの交信を一切禁じられます」

「あの人が人狼で、私はあの人に殺されました……、なんてしゃべられちゃうと困るからですよね」

「そのとおりよ。だんだんわかってきたじゃない」ミスズがうなづいた。「そして、昼の会議へと移ります。昼の会議では、生きのこった住民たちによる自由な討論が交わされます。会議の時間は実時間の五分にしております。会議が終了すれば夕刻になって、^{リンチ}集団暴力投票がおこなわれます」

「^{リンチ}集団暴力？　なんですかそれは？」

「毎日夕刻になると住民たちの投票で一人だけ犠牲者を選ぶのよ。選ばれた犠牲者はみんな^{リンチ}で集団暴力で殺してしまうの」

「えー、わかんないですう。なんでそんな無益なことをするんですか？」

「無益かしら？　だってその人がもし人狼だったら、生かしておく
と逆にあなたが殺されてしまうかもしれないのよ」

「でも、犠牲者に選ばれた人が本当に人狼さんだったらいいんだけど、間違いとかはないんですか？」

「そのとおり！　住民たちは確信が持てないままそれぞれが犠牲者にしたい人に一票を投じるの。人狼じゃない人が集団暴力リンチされることもあるかもしれないわね」

「投票はどうやっておこなわれるんですか？」

「投票はゲームマスターが決めた順番にしたがって、生きのこりの住民たちが票を投じていきます。白紙投票は許されず、必ず誰かに一票を投じなければなりません。あつ、それから自分自身への投票も認められています」

「えつ、自分に投票するんですか？　そんなのありえないですう。」

「さあ、どうなんだろうね。まあ、やってみるとわかるわ。ひとつの選択権よ」ミスズはにこにこしている。「全員の投票が終わった時点で集計がおこなわれます。そして最多得票を獲得した者は、住民たちから集団暴力リンチで殺されてしまいます。でももし、同数票で最多得票獲得者が複数生じた時には、その日の集団暴力リンチは見送られます」

「へえ、同数票の時には集団暴力リンチはおこなわれないんですね。そうすると票数の調整のために自分自身に投票することも意味があるんですね」

「そうね。同数票の時にはさらに決選投票をおこなうルールもあるけど、今日のゲームは決選投票はおこなわないというルールで進行します。集団暴力投票リンチは、村人側からすると人狼を殺す絶好の機会なの。人狼が誰なのかという正しい判断こそがゲームの勝敗を左右するのよ」

「なるほどー。奥が深いですね」

「これで毎日くりかえされるイベントは全部説明したわね。じゃあ、つぎに五つの役割について説明していくわよ」

「はい、お願いします。師匠！」

「いつから、師匠にされちゃったのかしら……」ミスズが苦笑いをした。「まず最初に説明すべき役割といえぱり人狼よね。人狼は夜になると同居人を一回だけ襲うことができます」

「一回だけ？」

「つまり一人の人狼が一夜に殺せる相手は一人までということね。襲った相手が村人や狂人であれば、相手は速やかに殺されてそこには死体ができます。もし、襲った相手が祈祷師や牧師であった場合のやりとりは後で説明するわね」

「ふむふむ、村人と狂人は襲われたら最後なんだけど、祈祷師と牧師はなんらかの抵抗手段があるんですね」

「そうよ。それから先ほども説明したけど、人狼同士はお互いに秘密の会話を自由におこなうことができるわ」

「テレパシーで作戦を練ることができるんですね。怖えええ……」

「あと人狼は全ゲームをつうじて一夜だけパスをすることが許されているわ」

「パス……ですか？」

「パスとは、同居人を襲わないで翌朝をむかえる行為のことよ。パスは全ゲームをつうじてたったの一回しかすることができないの。もし二回目のパスを人狼がうつかりしてしまうと、翌朝、その人狼は餓死して死体となってしまうのよ」

「えーっと、要するに人狼さんは毎日人間を食べないと餓死してしまうんですね。ただし、一日だけは人間さんを食べなくてもなんとか我慢ができると……」

「そうよ。ある意味哀れな存在なのよね」

「でも、人狼の目的は村人チームの全滅なんですよね。じゃあ、毎晩相手をひたすら食べまくったほうが有利になるんじゃないですか

？ パスなんてもつたいないですよね」

「アイリスさん……、^{リンチ}集団暴力のこと忘れていない……？」

「おー、そっか、調子にのつてあんまり夜に相手を殺しすぎると、逆に昼に^{リンチ}集団暴力のターゲットにされやすくなるんですね。うーむ、奥が深いー」

「さらに、人狼のパスに関してはまだルールがあるわ。同居人の中に人狼しかいなければ、お互いの人狼はパスを消費せずに翌朝をむかえることができるの」

「うーん、ややこしいですね。お泊りの同居人が人狼さんであれば、全ゲームをつうじて一回しかできない貴重なパスを消費することなしに、誰も殺さずに朝をむかえられるんですね。人狼さんたちにとつてはありがたいルールですね。でもそれって、現実にはおかしくないですか。人狼さんは人間を食べないと餓死しちゃうはずなのですね」

「うーん、その説明って確かに無理があるわね。一説によると、人狼同士でお互いに噛みつき合って飢えをしのぐそうよ」

「やっぱ、苦しい説明ですよ」私は苦笑いをした。

「そうね。でもそのルールのおかげでゲームはより面白くなるわ。また、襲った相手が牧師であり、ブロック（その説明は後述します）された場合にも、襲った人狼はその夜にパスを消費しないわ。でも同居人が牧師であっても、人狼がその牧師に攻撃をしなければ人狼はパスを一つ消費することになります」

「ひえー、師匠、頭がついていけないですうー」

「そうよね。このあたりの細かい説明は実際にゲームをやってみないとわからないよね」ミスズがうなづいた。

「次に、狂人について説明するわね」

「はい、師匠、お願いします」

「ちよつと、その師匠って呼び方なんとかならないのかな？」ミスズの眉がややひきつっている。

「えっ、やだなー、師匠は師匠ですよ。では師匠、お願いしますで

す」

「はいはい、狂人は人狼側に所属していて、人狼の手助けをするのが目標なのよ。だけど肝心の人狼が誰なのかは、狂人自身で推測するしか手段がないけど……」

「えーと、狂人さんは勝敗を競うチームの立場としては人狼さんたちの見方なんだけど、プレーヤーの誰が人狼さんなのかを知らないんですね」

「そうよ、そして人狼たちも誰が狂人なのかを知らないの」

「いつそのこと、私は狂人でーすって宣言しちゃったらいじゃないですか」

「あなた……^{リンチ}集団暴力で殺されたいの？」

「ひえー、そつかあ。村人チームからすると狂人さんは敵であるわけですね。狂人さんは目立たず密かに人狼チームの手助けをしなければいけないんですね。でも狂人さんはなにか特殊能力を持つてないんですか？」

「狂人はね……、夜ならいつでも好きな時に自殺することができの」

「へー、すごい、すごい！ 自殺ができるんだー。……？ あのお、師匠——、自殺できてなにがうれしいんですか？」

「あんただんだん地が出てきたわね……」

「あはは、すみません。つつい」

「もし狂人が自殺すれば、その部屋には彼の死体が生じることになるわよね」

「ですよ。それで狂人さんはゲーム脱落なんですよ。損することばかりじゃないですか？」

「そうでもないのよ。翌日の会議で、狂人が自殺した部屋で生きのこった同居人は、死体が生じた理由を皆に説明しなければならなくなるよね。状況を知ることができない第三者からしてみると、生きのこった同居人が人狼じゃないかという疑惑が生じるわ」

「あー、そうか！ 生きのこった同居人は、翌日の自分の弁明をし

くじつちゃうと、夕刻の集団暴力投票で最多得票者にしたてられて殺されちゃう危険もあるんだ！」

「このように、狂人は自殺するという能力を上手に使いこなせば、人狼側の勝利に大きく貢献することもできるの。もちろん、自らが生きのびて、会議などで村人側の意見を混乱させる発言をすることもできるわ」

「ふむふむ、ある意味ゲームの鍵を握る存在なんですね」私は感心した。

「続けて、村人側の役割の説明をするわよ。まず、祈祷師だけど、夜に同居人の人狼から攻撃を受けても、持参している聖水の人狼にふりかけることで人狼を逆に殺すことができるわ。この行為は、かえりうち（カウンター）と呼ばれています」

「おー。祈祷師さんって無敵なんですね。あたし祈祷師さんになりたいですう！」

「あのね、ロールプレイングゲームじゃないんだから、参加者に職業選択の自由はないのよ」

「えー、残念ですう。ファンタジーの世界も不況なんですね」

「あんまり関係ないと思うけど……。それで、かえりうちは、あくまでも、相手の人狼が襲いかかってきた時のみに発動することができて、全ゲームをつうじて一回しか使用できないのよ。一度、かえりうちをおこなった後で、別の人狼から再び襲われた時には、祈祷師はあえなく殺されてしまうわ」

「なんだ、無敵じゃないんですか。じゃあ、祈祷師さんになるのやーめた」

「だから、あなたに職業選択の自由はないんだってば……」

「やだな、師匠——。冗談ですよー」

ミスズの右手の握り拳がわなわなと震えている……。

「こほん——。次に牧師について説明するわよ。牧師は、同居人の人狼が襲いかかってきた時に持参している十字架をかざすことで人狼の攻撃から逃げることができるわ。この行為を、ブロックと呼ぶ

ことにします」

「祈禱師さんがかえりうちで、牧師さんはブロックですか。どう違うんですか？」

「ブロックがおこなわれると、人狼も牧師も生きのこったままで翌朝をむかえるのよ。それからブロックも相手の人狼が襲いかかってきた時のみ発動が許されていて、また全ゲームをつうじて一回しか使用することができないわ。一回使用してしまえば十字架は壊れてしまい、後になって再び人狼から攻撃されればそこで牧師は殺されてしまうの」

「かえりうちは相手の人狼さんを殺すことができるけど、ブロックはただ生きのびるだけなんです。つまり……、ブロックが発動されればなにも起こらなかったことと同じになってしまうんですね」

「うーん、そうでもないわよ。まず人狼が襲いかかって牧師がブロックすれば、お互いに相手の正体がわかつちやうよね。それから、人狼は牧師にブロックされた夜はパスの消費がないのよ」

「そっかあ。じゃあ、相手が人狼さんだってわかったんだから、翌日の集団暴力投票で吊るし上げちゃえばいいじゃないですか！」

「さあで、そう簡単にいくのかな？ 相手の人狼が、私が牧師でブロックしました、なんて発言したらどうなるのよ？」

「えっ、師匠……、あつたまいー！ そうですね、プレイヤーたちにはどっちが人狼か牧師なのかわからないんですねー」私はうなづいた。

「最後に村人なんだけど、村人は何の特殊能力も持たない限りなく無力な存在です。もしも、同居した人狼に襲われればあっ気なく殺されてしまうわ」

「ひえええ、むごすぎるー。あたし絶対に村人だけにはなりませんです」

「だから、おめーに職業選択の自由はないってさっきからいつてるだろーが！ はっ……」

「ミスズです。先ほどは取り乱してしまつて申し訳ありませんでした。そして、読者の皆様におかれましては、長々と人狼ゲームの説明にお付き合いさせて本当に申し訳ありませんでした。さて、本編では九人の参加者による人狼ゲームが展開されます。通常九人の時には、初期の役割の人数配分が、人狼二人、狂人二人（人狼側は四名）、そして、祈祷師一人、牧師一人、村人三人（村人側は五名）となるのが標準なんです。が、本編のゲームでこの標準どりの人数配分がされるかどうかはわかりません。また、祈祷師や牧師が必ずひとり以上いるであろうという推測も、安易には決めつけられないくださいね」

「師匠——、あたしも今日のゲームに参加してよろしいでしょうか？」

「もちろんよ。是非、人狼ゲームを楽しんでくださいね」

「師匠、どうせなら私、祈祷師になれたらいいかなって……」

「はいはい、考えとくわ……」ミスズはお茶をにごした。

それでは、人狼ゲームの世界を心ゆくまでお楽しみください……。

汝は人狼なりや？（後書き）

「小説・人狼ゲーム（知識編）」をお読みいただきありがとうございます。

それでは、本論の「小説・人狼ゲーム（出題編）」にお進みください。（作者）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4016i/>

小説・人狼ゲーム（知識編）

2010年10月8日15時27分発行